

世界森林調査行 No.3

インドネシア国スマトラ島ムシ河
上流域森林資源調査 後半
(1978年11月~1979年1月)

(株)ゼンシン 技術調査室長
技術士 (森林部門)

増井博明



1978年



2013年

8. 流れる血

その日、森林調査が終わってルブクリンガウのホテルに帰るとズボンの左脛が血で赤く染まっている。めくると真っ赤な血がドロドロと流れている。「なんだ。こりゃあ。大怪我をしたのかな？まずいぞ。」ズボンを脱いでまた驚いた。パンツが真っ赤である。「アレー。大変だ。一体どうしたというのか？」大事な物も大丈夫かと思ひ下半身を入念に点検すると、股の付け根にヒルが取りついていて、ホッとしてヒルをそっと引っ張って取る。しかし、後に傷を残さないためにはタバコの火をあてるのが良く、ヒルがころりと落ちるのである。私はタバコを吸わないため引っ張って取った。

ヒルは一旦山に入れば、片足 10 匹くらいは取りつく。スカラジャで雇った作業員達は平気で血を流して、我々もすぐに慣れた。

また、ある時森林調査をしている時に後ろ首に汗が流れるので手でぬぐった。すると感触がヌルツとしている。手の平を見ると真っ赤である。ヒルが首すじに取り付き血を吸っていたのだ。

9. 本格森林調査

調査は道なき道に入る。林内では、航空写真を肉眼立体視し、自分の位置を確認する。だいたい巨大木の位置が分かり易いので、それらを選ぶ。位置が確認できたら、そこを基準点にし、航空写真上には針を打ち、裏面に No. を書き、記録する。そこから 100m 測量してラインを張る。そのラインの両側にある胸高直径 40cm 以上の大径木をデンドロメータで、調査プロット (枠) の中に入るかどうかを確認し、枠内に入る木の胸高直径と樹高を測るのである。

たった 100m 測量するだけでも、相当量の灌木

を伐り払わなければならない。作業員達はパラシ (ナタ) を持っている。我々が日本から持って来たナタよりも刃渡りは長く、いつも研いでいるので良く切れる。



森林内での測量

だが、林内は思ったより空間がある。北海道のササが繁茂したエゾ・ドド林の方がはるかに歩くのが困難だ。しかし、やたらニッパヤシのトゲが靴底に突き刺さる。

案内人の 2 人は靴を履いているのだが、他の 2 人は裸足だ。彼らの足はタコで固まって硬く、トゲのある木を踏んでも平気だ。

樹高はブルーメライスで測るのだが、広葉樹は樹冠が丸く広がっているため、樹高が 30m 以上になるとどこが先端か良く分からない。だから枝下高はかなり正確に測れるのだが、総樹高は頂点の位置を定め得るには場所を変えて何回も測り直し、平均値を取る。50m 以上もある木になると、樹高を測るだけでも相当に時間がかかる。

胸高直径は直径巻尺で 1.3m の高さ (胸高) の幹の回りに 1 周させて測るのだが、大木は板根を 2m 以上の高さまでも発達させているものも多く、その場合は板根の上を測るのだが、板根の上に乗

らなければならず、測るのには苦勞した。

樹種名は我々にはほとんどわからない。熱帯は本当に木の種類が多い。多様性に富んでいる。北海道のようにトドマツやエゾマツだけが、一面にはびこるということはなく、同じ樹種は少なく、多樹種が共存している。



50m 以上もある巨大木

樹種同定係りの 2 人は、まず幹の肌を見て同定する。それでも同定できないと、パラで板根を少し削って内部の色と木の匂いやなめて味などで同定する。樹高が高く、葉が取れないものが多いので、葉では同定できない。我々も慣れてくると、特徴がはっきりしている木は、同定できるようになったが、樹種名は同定係りの 2 人に任せた。

森の中の人、動物

こうして調査をしていて驚くことは、どんな奥地にも、一人あるいは数人で山中に住んでいる人がいることである。11 月 27 日には川沿いをスカラジャから 10km 程上流に進んだ。途中何度も川を渡渉する。腰までたっぷり水に浸かり、たまには泳がなければならないから、いつでも下半身はグショグショで、靴の中もいつも水が入ったままである。

いろいろ珍しいムシが林内には居る。体長 10cm 程の大きなダンゴムシ、ケラ、クモ。時には猛毒と言われているグリーンスネークにも出っくわす。



グリーンスネーク (*Dryophis prasinus*)

始末が悪いのはアリだ。乾いた林内には、そこから中に大群がいる。体にくっついてはやたらに刺す。日本では見た事のないムシが多く、気味が悪く見えるものも多い。南米に住むホエザルとは違うのだろうが、遠く近くにサルが良く通る大きな声で呼びかわす声が「ホオッフ、ホオッフ」と聞こえる。

そんな奥地で、木を伐り出している 3 人の少年に出会った。2m くらいの長さの大きな鋸を使い、両側をそれぞれが持ち、2 人で鋸を引いている。まだ、15~16 才くらいであろう。この子らは 2 ヶ月くらい一カ所にこもり、掘立小屋を作り、製材してから木を運び出すと語っていた。

その帰りには森林を焼畑で開き、陸稲を作り、バナナやパイナップルを食べて生活している一軒家で休ませてもらった。一軒家といっても高床式のニッパヤシをまぶした掘立小屋である。少年と少女 3 人が住んでおり、1 人の少女が赤ん坊を抱いていた。少年とその少女は夫婦であると言う。少年は 18 才、少女は 15 才とのことだった。ここでパイナップルやパパイヤをたらふくごちそうになり、スカラジャへ戻った。



チュルミン山からサム山とスカラジャ方面を望む

C/P 達

11月28日には作業監理団の2人が帰国のため、C/PのS氏、F氏と共にルブクリンガウに向かった。S氏は、林業総局へ戻って仕事があるのだが、F氏は、「私は、太っているから山へ入っても歩けない。皆が降りてくるまでルブクリンガウのホテルで待っている。」と言ってさっさと町へ降りてしまった。我々はあきれてものが言えなかった。まだ、35才くらいで働き盛りなのに。我々の世話をし、山を案内し、我々の技術を積極的に習得しなければならないC/Pなのに、我々が働いている間、町で寝ているというのだ。

一方、同じ職務にありながらS氏は良く働いた上に勉強も良くした。S氏は40才で、まもなく定年だと語っていたが、夜は統計の本で勉強しており、「これはどういう意味だ。」と質問されたりした。また、樹木の検索表を勉強していた。

この晩から雨が激しく降り続いた。

増水

11月29日は、その雨が残り、現場には行けず仕事はできなかった。マンディに行くとき川の水位は一挙に2m以上も上がっていて、濁流が渦巻いている。

用を足すにも岸に生えている木にしがみついでなければならなかった。



増水で水没した家

遭難騒ぎ

11月30日になると川の水位はウソのように下がっていた。ここに落とし穴があり、我々は危うく遭難するところであった。

この日は全員で調査に向かった。奥地に入った所で、2パーティーに分かれて仕事をするこ

した。それから1時間程歩いて早くも道を失った。遠く、テンカル山というのを目安に黙々と進んだ。途中ムササビなどを見つけると作業員は眼の色を変えて捕まえようとする。

(湿地林の恐怖—前半の冒頭に同じ)

調査プロットに向かって歩いているが、林内は水浸しである。標高の高い方へ進んでいるのに段々と水位が増してくる。水は膝より上まで上がってくる。ようやく目的地に着き、調査を始める。30m程も樹高がある木が林立している。水は腰までできた。水に浮いている訳の分からない昆虫が人の体を陸だと思って沢山這い上がって来る。不気味な生物が水中から浮き上がってきそう。プロットを設定するだけでも相当な時間がかかる。

先頭でけん縄を引っ張っている作業員の1人が「もう行けない。」と言う。それを私が「行け。行け。」と行かせる。彼は首まで水に浸かって泳いで行く。これは大変であった。仕事どころではなく、ここで引き返すべきであった。

(どうにか仕事を終える)

どうにか仕事を終えて、焼畑に出る。そこで2パーティー全員が運良く落ち合うことができた。そこは、もう街道から10km以上も奥地へ入った所で、よくこんな奥地に人が住んでいると思う程であった。一人の男がキコリをしながら住んでいた。その小屋で少し休ませてもらい帰路に就いたのが午後4時であった。

ここに、山に慣れてきた我々の誤算があった。4時にはもう家に戻っていなければならなかったのである。それでも2時間もあれば十分に下れると思っていた。しかし、ここへ来るのさえ、迷いながら来たのであるから同じ道は引き返せなかった。そのキコリに街道へ出る道を聞いて出発した。

(林内で泳ぐ)

だが前々夜の雨で、林内は次第に水かさが増して行っ。とうとう我々は林内で泳がなければならなかった。我々は完全に道に迷ってしまった。荷物は全部頭の上にくくりつけて泳ぎながら進んだが、作業員の1人が弁当箱を水中に落としてしまった。すると別の精悍な作業員が水中では全く

何も見えない泥水の中に潜り、いとも簡単にそれを拾って来た。そして彼はするすると木に登ると方向を確かめた。闇が迫って来始め、我々の心にくすぶっていた不安が、現実のものとなった。皆、口数が少なくなる。

(N氏のリーダーシップ)

この時 N 氏は素晴らしいリーダーシップを発揮した。精悍な作業員にたいまつを持たせ、先頭を歩かせ、彼の勘に運を任せ、自身は一番後ろから全員の安全を守りながら、隊が一団となり危険が無いように進ませる。たえず冗談を飛ばしながら、皆から不安感を取り除こうとする。



N氏と増井

遂に真っ暗となるが、我々は依然として湿地林の中である。夜行性のトラやヘビが出たらどうするのだろうか。体も冷えてきた。

(部落に着く)

しかし、くたくたになって来たところで、ようやく湿地林を抜け出ることができた。遠くに部落の灯りが見えた。しかし、それからがまだまだ長かった。木の根につまずきながらようやく部落に辿り着いた。既に深夜0時に近かった。

(違う部落だった)

しかし、そこはスカラジャではなく、パンカランといってスカラジャから 4Km も離れた部落だった。何はともあれ助かった。全員消耗しきっていた。

(スカラジャへ)

運転手がジープで迎えに来て、我々はスカラジ

ャへ戻った。スカラジャの部落の人々は心配しており、山へ我々を捜しに入ったそうだ。我々が無事であったことを知ると村中総出で無事を祝ってくれた。会う人ごとに抱き合い、握手をするのであった。これほど人の暖かさを感じたことはなかった。そこで飲んだ熱いコーヒーの美味かったことは決して忘れない。ここで事故にでもあったら T 氏のクビも飛んでいたことであろう。

レクリエーション

その遭難騒ぎの後には、我々も慎重になり早立ち早帰りを心掛けた。こうした困難な調査では心身共に疲れて来る。息抜きも必要だが、家に帰るとその日の整理をしなければならず、なかなか息抜きはできなかった。

団長は、講釈が上手でその講釈が面白いものだから、このような苦労が伴う調査では、団を陽気にする大きな役割を果たした。

盗まれる物

しかし、我々の物が盗まれるのにも困ったものだった。まず、スカラジャに入ったその日に団長の作業靴と私のビーチサンダルが盗まれた。ビーチサンダルならすぐに手に入るが、作業靴には困った。その他、シャンプーや整髪料あるいは缶詰などが、毎日少しずつ減るのである。我々は大目に見てやっていたが、一番困ったのは I 団員の時計が盗まれたことだ。彼のその時計は恋人と交換してきた大切なものだったからだ。隣に住む部落長に「時計がなくなった。どうしても大事なものだから絶対に捜してくれ。」と頼み込んだ。すると彼は翌日、「子供達が持って遊んでいた。」と時計を持って来た。

ブヨヤカで腫れた足

それやこれやで 2 週間もスカラジャで過ごす全員ブヨヤカにさされた足が、凸凹に腫れ上がって来た。団長は換金のためにジャカルタに向かったが、大使館の医者に足を見せたとのこと「ひどいですねえ。」と言われて塗り薬を大きなビンに一杯貰って帰って来た。その後、仕事から帰ってくると薬の塗りあいである。それでもそのうち、皆足の付け根のリンパ腺が腫れて来た。

スカラジャ最後の晩

それやこれやで苦勞したが、スカラジャでの仕事も終わり、最後の晩となった。我々は、部落の人を招いて、お礼の宴会を開いた。

10. ムワラルピットへ スカラジャを出発

翌日荷物を片付けていると、人々はあれをくれ、これをくれと物乞いに来る。作業員達は、これから先も是非連れて行ってくれという。皆大変良く働いてくれたので、48才の年寄り1人を除いて、他の3人は連れて行くことにした。作業員達の給料の支払いは、最初T氏を通して払っていたが、T氏がいつも何割かをピンハネするので、最後は一人一人呼んで、我々から支払ってやると、大いに感謝された。

我々がここから向かったのは、さらに奥地のムワラクラムというカンボン（部落）である。ムワラルピットという町までジープで行き、それから先は道がないのでボートで川を遡るのである。ムワラルピットは、ルブクリンガウより少し小さな町だ。

ムワラルピットの不潔なホテル

ムワラルピットにはホテルがあり、12月14、15日と2泊した。しかしホテルとは名ばかりで、不潔きわまりないものだった。湿った布団。汚い水。ここを流れるルピット川は汚水のような。あまりに汚いのでマンディはしないで、雨が降って来ると外へ飛び出しシャワー代わりとした。布団にダニがいるらしく、かゆくてほとんど眠れなかった。もしかすると南京虫かも知れない。

ムワラルピットにいる間、S氏の代わりにA氏やって来た。彼はまだ25歳だがしっかりしていた。英語も堪能である。「私の友人のF氏が働かなくて申し訳ない。」と、しきりに謝っていた。

11. ムワラクラムへ ぼられるボート代

ここで、奥地に入るボートの交渉でまた難儀した。ムワラルピットから10km程離れたスラングンという地域の役所で交渉を行ったが、10~20人乗りのエンジン付きのスピードボートが1日2

万5千ルピア（約5千円）だと言って来た。これは、この辺りの相場としては、あまりに法外な値段である。1日1万ルピア（約2千円）が相場と聞いていたからだ。後に、もめないように契約書を作り、往復その他毎日少しずつの送り迎えで合計8万ルピア（約1万6千円）でサインした。しかし、サインをした後すぐに、もう3万ルピア（約6千円）出せと言ってきたのには驚いた。「それならもう別な場所で調査をするからムワラクラムには行かない。」と言うと、元の8万ルピアで良いと言う。



エンジン付きスピードボート

化膿する足

私は、左足の甲の先端部が水虫のようなものにかかったようで、とうとう化膿してしまい、スラングンの病院で見てもらった。医者はペニシリンを打つという。この辺りはまだ何でもペニシリンが効くようだ。お尻にペニシリンを打ってもらいボートに乗り込んだ。帰国後ペニシリンショックも検査せずに良くペニシリンを打ったものだねと同僚から言われ、後から空恐ろしく感じたものだ。この役所から陸軍の兵士2人がライフルを持って警護にあたった。

ムワラクラム

ムワラクラムには、我々は、12月16日から12月24日まで滞在した。ここは、スラングンからスピードボートで約4時間。途中の川岸では、体長3mはあろうかとも見える大トカゲを見た。全く中生代の恐竜の生き残りといった感じだ。ムワラクラムでは川沿いの役所の施設に泊まった。簡易ベッドが10本程あり、壁には日本の女優をモデルにしたインドネシア語のカレンダーが掛け

である。

ムワラクラムでの生活

ここでの調査はすべてスピードボートで遡って行った。川沿いのほとんどが天然林であり、焼畑が少ないので、却って調査ははかどった。しかし、私の足は完全に化膿してしまい、痛くて靴が履けなくなってしまった。ここの医療機関に行くと、保健士が一人いて、抗生物質の注射をしてくれ、やたらに抗生物質の飲み薬をくれる。私は山に入れなくなったので、皆が山に行っている間、データの整理をしていた。その合間を見て釣りをした。



スピードボートで川を遡る

ムワラクラムでの釣り

宿舎の前の川は川幅が 50m 程もあり、相当に水量がある。ここで釣れたのは 20cm~30cm 程のナマズである。もし長い海竿とリールを持って来ていれば、ムワラルピットの市場で売っていた 1m 以上もあるナマズが釣れただろうにと残念であった。

12. 先にルブクリンガウへ下りる

C/P の T 氏

私の足が化膿し歩けなくなったので先にルブクリンガウに T 氏とともに下りることにした。

スランゲンで私がボートの運転手に 1 万 5 千ルピア (約 3 千円) やれと T 氏に渡すと、その場で T 氏は 1 万ルピアをポケットに入れてしまい、運転手には 5 千ルピアしか渡さなかった。「お前にやったのじゃあない。運転手にやれ。」といっても「彼は私がいなければ仕事ができない。お前も私がいなければ仕事ができない。これはアラーの神が私にくれたものである。」となめられたもので

ある。



増井と T 氏

全く気に入らない奴だ。幾つだと聞くと 38 才と言ったり 50 才と言ったりする。容貌から見るとおそらく 50 才前後だろう。

映画

ルブクリンガウでは、また一人でデータの整理をしながら皆の帰りを待った。ルブクリンガウにある映画館に行ってみた。上映されているのはカラテ映画で、日本人やアメリカ人が悪者で、インドネシア人が正義なのである。「ヤマハ」という名の寶石泥棒がインドネシア人の秘密警察にやっつけられるという勧善懲悪のものである。言葉は分からないが、ストーリーが単純で面白かった。インドネシア人が活躍する時は、大拍手である。

夜中の到着

12 月 27 日に皆がルブクリンガウに戻る予定であった。この日の夕方に到着予定で T 氏も来てほしい遅くまで待っていた。しかし、夜遅くになっても到着しないので、T 氏も帰り、戻って来るのは明日になるのであろうと思い寝てしまった。すると午前 1 時過ぎに到着した。雨で道路が寸断されて大変な苦勞をしたとのことだった。

目標達成

ルブクリンガウで全員が集結するとやっとな現地調査は終了したのだという気がしてきた。全部で 91 点のプロットを調査した。80 点以上が当初の目標であったから、目標は達成できた。これ以上雨期の森林に入るのは危険ということで、後はデータの整理と分析にあたった。

ルブクリンガウの医者

ルブクリンガウでは団では I 氏を除いて医者のお世話になった。彼は最も若く 26 才で、細いので一番強かった。私は足の化膿。団員 M 氏はお尻に大きなおできができてしまった。団長はリンパ腺を腫らしてしまった。

M 氏はルブクリンガウの病院で、おできの切開をしなければならなかった。その様子を見てみると、うつぶせに寝かせて麻酔も打たずに、おできを中心に 2cm くらい切開すると棒で突っつきぐるぐると掻き回し、膿を全部出し切った後に、消毒用のガーゼを入れて終わりだ。M 氏は痛みで貧血を起し、顔面蒼白だ。2~3 日したらガーゼをとれば良いという。まことに簡単だ。だが、治りは早かった。団長と私は例によってお尻に注射を打たれた。

帰途

いよいよ帰途だ。全員の体重が 5kg 以上減り、まるで敗残兵だ。

ラハットへ

12 月 30 日、ルブクリンガウの役所へ挨拶を済ませて、N 氏、T 氏に別れを告げてパレンバンへ向かう。ラハットまでは順調に着くが、ラハットからパレンバンまでの道はやはり雨で寸断されているという。その晩はラハットに泊まった。

大晦日

いよいよ大晦日である。道路が寸断されていて仕方がないので、遠回りでも迂回して、車が通れる道を選び、インド洋に面した町ベンクールに向かう。ベンクールは静かで、思ったよりもきれいな街であった。ここで新年を迎えようとは夢にも思わなかった。インドネシアでは正月休みは元日だけらしい。イスラム教国なので、そちらの関係の行事の方がにぎやかなのである。ホテルのボーイに「スラムタウンブルー（新年おめでとう。）」と言われる。港に行ってみると、子供が大きなタイのような魚を釣っていた。町をちょっと見物してからパレンバンへ向かった。

13. パレンバンにて

パレンバンに到着した時は、丸 2 日間もジープで揺られ、疲れきっていた。皆しゃべる気力もない。しかし、ここでもの凄く辛い唐辛子が乗ったパダン料理を食べたら皆シャキッとしたのには驚いた。

パレンバンの営林局

1 月 2 日は休養し、3 日はパレンバンの営林局へ、挨拶へ行った。ここの局長はなかなか英語がうまく、日本をちくりと皮肉った。「戦争中は、我々は皆日本の方向へ向かっておじぎをさせられたものである。戦後、日本は平和になり、日本人の体格は大きくなった。戦争中は我々と同じくらいの体格であった。オリンピックへ出てくる日本選手などは大きくてビックリする。日本人は大したものだ。しかし、今はもの凄く経済侵略だ。今後は侵略すること無しに、純粋に協力してもらいたい。何はともあれ、皆無事でご苦労様でした。」などと言う。

14. ジャカルタ到着

そして、1 月 4 日ようやくジャカルタへ戻った。ジャカルタでは再度プレジデントホテルに向かった。このホテルは一流で、清潔でまるで天国だ。世の中にこんなにきれいな所があったのかと思うくらいである。環境が清潔な状態になった途端に、私の足も急速に快方に向かった。

報告

翌 5 日、早速大使館へ行き現地の報告をした。皆の無事ジャカルタ着を喜んでくれた。ジャカルタではボゴールの林業総局へ、現在までのまとめを報告するためデータの整理と解析を急いだ。

ボゴールの林業総局へ

調査の疲れも癒え、我々は資料のまとめも終わり、ボゴールの林業総局へ最後の挨拶へ行った。ここでの会議で、F 氏は次長にこっぴどく怒られたが、どうも茶番のようでもあった。なんやかやでどうやら友好的雰囲気の中に話は終わった。

また一悶着

この調査では、航空写真の複製はインドネシアの会社に委託していた。その航空写真の複製の値段について、例のごとく金額面で折り合いがつかず、一悶着あった。

この調査は、まだ続いており、次回調査団が来るまでに解決しようということになった。

大使館と JICA の晩餐会

ジャカルタを発つ前日、1月10日、大使館の書記官、JICAの担当者が、晩餐会を開いてくれた。長かった2ヵ月だが、あっという間に過ぎ去ってしまったようにも思える。

日本へ

そして1月11日とうとうジャカルタを発たなければならなかった。様々な思いが駆け巡り、スカラジャでの人と自然はとりわけ忘れ難かった。都会の喧騒にしか住めない我々にとっては、それは理想郷だったのかもしれない。どんなに貧しく、不潔であっても、おおらかで、清々と生きているではないか。

だが、そこも徐々に文明に侵されつつある。我々日本人が彼らのためにといて森林の管理計画を立てるのだ。彼らにとっては原生林と見えるような森林を焼畑で燃やしてしまうことなど何でもないことである。確かに焼畑を行うことは自然破壊に通じるように見えるかもしれないが、彼らは延々と大昔からそうした生活をしてきたのだ。我々の計画が彼らの生活に制限を与えるような恐れもある。

しかし、それよりも当面の利益を追求し、チェーンソーで森林を伐採し、ブルドーザーで伐り開いて行くことに許可を与えてしまう方が、はるかに早く、壊滅的に森林が無くなってしまうのだ。

作業員達は良く働いたし、信じられないくらい動物的な感覚が発達していた。おそらく人間本来持っている能力を普通に発揮していたのだろう。そして人懐っこく、素朴な連中で、とても好感が持てた。

しかし、都会でも田舎でも役人達は、どうしても好きになれなかった。いつでも金をせびることしか頭のない連中ばかりであった。だが、それも

彼らにとっては生きる知恵であろう。裏でこそこそやるよりも、はるかに素直かもしれない。

インドネシアとの別れを惜しみつつ、手を振りながら一歩ずつタラップを登って行った。

おわりに

我々の作成した森林管理計画が生かされなかったのは非常に残念であるが、その後の開発の状況から見るとどちらかと言えば、開発の過程で森林資源量調査の結果が利用されたのではないかという疑念も生じる。

当時は、コンセプションというシステムがはびこっていた。これが森林を保全するどころか、森林の開発を進めたと思う。コンセプションとは、政府が木材会社などへ森林の樹木の伐採権を売り与え、政府が儲け（それも国によっては各階層の役人の懐へ大半は消えてしまうことが多く）、木材会社は樹木を伐採し売った代金で儲けるというシステムである。

当時のインドネシアが最たる賄賂政治の国家であったから、そう思ってしまうのかも知れない。今は少なくとも表面的には賄賂国家ではないと言われており、本質的にもそうあって欲しい。

世界のどの地域でも共通であるが、守るべき森林は、政府の強烈な保護政策がなければ守るのは難しい。

森林が再生可能と行ってもインドネシアのような熱帯の太陽が強烈な国では、一旦森林が伐採されてしまえば、元の天然林に再生させるのは何百年後には可能かもしれないが、生態系の条件から植林しても直ちに戻すのは不可能に近いくらい難しい。

結局、利益を求め、現世の自分の利益だけしか考えない人間に、元はと言えば誰の所有物でも無い自然資源はいとも簡単に食べ物となってしまうのだ。

何とか森林を守りたいと思いつつ次の調査に向かうのであった。

終わり

(本稿は、私が35年前に調査したフィールド・ノートを基にまとめたものである。)